

2022年3月27日 佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書5章21～43節

説教題：ただ信じていなさい

神学校にいる時に、色々面白い神学生の方の話を聞きました。「ハレルヤおじさん」という方もおられました。私達は寮で暮らしたのですが、朝5時頃になると、どこからか「ハレルヤ、ハレルヤ！」という声が聞こえるというのです。それは1人の神学生が、毎朝、外に出て叫んでいる声だと分かって、私達は「ハレルヤおじさん」と呼んでいました。女子寮にも面白い方がおられたそうです。朝、起床時刻になると、自分で自分に向かって「タリタ、クミ。少女よ。起きなさい」と言って、自分で「はい」と返事をして、起きている方がおられるということでした。まだ20歳前なのに「祈りの器」のような方もおられました。色々な方から刺激を頂いた神学校生活でした。

さて「タリタ、クミ」、これは「少女よ。起きなさい」というアラム語です。アラム語は、イエス様が話しておられた言葉です。イエス様が少女を生き返らせなされる時に言われたこの言葉を聞いた弟子達は、その出来事と同時に、「タリタ、クミ」と言われた言葉が強烈に心に残ったのでしょう。だから、「新約聖書」はギリシャ語で書かれましたが、ペテロの語ったことをマルコが書いたと言われる「マルコ福音書」は、イエス様の言われた「タリタ、クミ」の言葉をそのまま書き記したのだと思います。

この箇所は「2つの癒しの物語」から構成されています。「12年間も治らなかった漏出の病気が癒される女の物語」と「死んだと思われた12歳の少女が生き返る物語」です。この2つの話が、というか「長血の女」と「会堂管理者ヤイロ」の姿が私達に、「信仰とは何なのか、どのようなものなのか」、そのようなことを語ってくれます。2つに分けてお話しします。

1. 信仰の媒体としての御言葉

初めに登場するのは会堂管理者ヤイロです。ヤイロはイエス様の所に来て、ひれ伏して「自分の家に来て娘を助けて欲しい」と頼みました。それでイエス様は彼と一緒に掛けるのですが、すぐに「長血を患った女」が現れて、話はイエス様と「長血の女」とのやり取りに移ります。

この女性は、12年間も長血を患っていました。誰も治すことが出来なかったのです。病気が苦しいだけではありません。当時の律法は「漏出のある人は宗教的に汚れている」と定めていました。だから「社会生活の中心」である会堂からも締め出されていたと思います。「なぜ自分だけ、こんなに長く苦しまなければならないのか、そう思いながら生きていたはずです。そんな時に「イエスという人は病気を癒す力を持っているらしい」と聞いて、藁にもすがる思いでやって来たのでしょう。ところがイエスの所に来てみたら、群集で一杯でした。「宗教的に汚れている」とされていたこともあったでしょう、正面切ってイエスの前に出て「癒して下さい」と言うことは出来ないのです。しかし『お着物にさわることでもできれば、きっと直る』と考えて(28)、イエス様の着物(の房)に触れるのです。

イエス様は、誰かが癒しを求めて着物に触ったことに気付かれます。そして「わたしにさわったのは、だれですか」(45)と、その人を探されます。弟子達は「大勢の群集が押し迫っているのに、誰が触ったかもないでしょう」と言いますが、イエス様は女が癒されたことで満足されませんでした、必死に探されました。女の方は「とんでもないことになった」と思ったでしょう。イエス様の服に触れたら、その場をそっと立ち去るつもりだったと思います。しかし「イエス様の様子を見て観念して」というか、イエス様の前に出て「自分の背負って来たもの、切なる願いを込めて触ったこと、そして癒されたこと」、全てを告白するのです。人前で話したくないことです。しかし、誠実さと勇気を振り絞ってありのままを告白するのです。そこにイエス様と彼女の「1対1の関係」が生まれたのです。そしてその時にイエスは「あなたの信仰があなたを直したのです」(34)と言われたのです。これは「口語訳」の「あなたの信仰があなたを救ったのです」(口語訳 34)の方が言葉の意味を良く伝えています。ここで起こっているのはイエス様と女との「1対1の人格的な交わり」です。最初にイエスに触った時、彼女には「イエスがどのようなお方なのか」関係がなかったと思います。「病が癒されるかどうか」、

それだけが問題だった。でもそれでは、彼女は「癒された」かもしれないが「救われた」ことにならないのです。「これからも神の御手の中で、神の顧みを受けながら生きて行く」ということに、「神の中に希望を見て行く」ということにならないのです。だからイエス様は彼女を探されたのです。彼女は、この後どうやって生きて行ったのでしょうか。それは分からない。しかし、イエス様から「あなたの信仰があなたを救ったのです」(口語訳 34)と言って頂いて、さらに「安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい」(34)と言って頂いています。「すこやかでいなさい」という言葉は「今の癒された状態でいなさい」という言葉です。「私との交わりの中で生きなさい」と理解しても良い。その言葉は、彼女にとって、「病が癒された」だけではない、神様による「受け入れ」の宣言だったのです。そのことを可能にしたのは、彼女とイエス様との「1対1の人格的な交わり」です。その交わりを、イエス様は「信仰」と呼ばれたのです。信仰とは、イエス様との1対1の人格的な交わりではないでしょうか。

では、私達はどうやって「神様(イエス様)との1対1の関係」を求めて行けば良いのか、何がそれを可能にするのか。それを教えてくれるのが「イエス様とヤイロの物語」です。ヤイロはどのような思いで「イエス様と『長血を患った女』とのやりとり」を見ていたのでしょうか。「何でもいいから早くしてくれ」と叫びたいような気持ちだったのではないのでしょうか。しかしイエス様に任せ、イエス様を信じるしかなかったのです。ところが、そこへ家から絶望的な知らせが届きます。彼はくず折れそうだったでしょう。誰にぶつければ良いか分からない絶望(怒り)の気持ちだったでしょう。しかし、その彼を支えたものがあつたのです。イエス様の言葉です。「恐れなくて、ただ信じていなさい」(36)。

「ルカ8:50」には「恐れなくて、ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります」(ルカ8:50)とあります。親でもなければ、誰がこんなことを信じられるのでしょうか。しかしヤイロは、イエス様の言葉に支えられるのです。そしてイエス様と共に娘の遺骸が横たわっているはずの家に向かって歩くのです。

ヤイロも、「娘の癒し」を求めてイエス様の許に来た時、「癒しをする人、癒しの力を持った人」という見方しかしていなかったと思います。しかし、『長血の女』とイエス様とのやりとりを経て、「イエス様の言葉を信じること、身を委ねる」ことを学ばされるのです。ヤイロにとっては「恐れなくて、ただ信じていなさい」(36)というイエス様の言葉だけが、ただ1つの望みだったのです。人間的に考えれば愚かな望みです。でもイエス様のその言葉に支えられ、励まされ、その言葉を握ってイエス様と一緒に歩む中で、彼はその言葉を通して取り扱われるのです。

横田早紀江さんという拉致被害者のお母様のことについて以前もお話しましたが…。彼女が信仰を持つ切っ掛けになるのは「ヨブ記」の言葉ですが、彼女の「神様への信頼」を深め、歩みを支えているのは「イザヤ書」の言葉です。「…横暴な者に奪われた物も奪い返される。あなたの争う者とわたしは争い、あなたの子らをこのわたしが救う」(イザヤ49:25)。めぐみさんが帰って来た訳ではない。しかし、この言葉を握り締めて歩く中で、彼女は神様との人格的な信頼関係を築いて行かれるのです。そして今も神様の御力に支えられて、希望を与えられて、生きておられるのです。

「長血の女」と同じように、ヤイロもイエス様との「1対1の人格的な関係」を経験しました。その「1対1の関係」において大切な役割を果たしたのが「イエスの言葉」だった。「イエス様の言葉に身を委ねる。御言葉を握り締める」ということだったのです。ここに私達が「イエス様(神様)との1対1の関係」を持つために何よりも大切なこととして「神の言葉に触れる」、「神の言葉を握る」ということが教えられているのです。

ヤイロの家に着いた時、イエスは言われました。「子どもは死んだのではない。眠っているのです」(39)。人々はあざ笑いました。しかしその人々は、主の御業を見ることは出来なかったのです。愚かになってイエス様の言葉を握り、イエス様の言葉にすがったヤイロは、主の祝福を見るのです。「長血の女」をその後、死の間際まで心健やかに生かしたのも、イエス様の言葉—(イエス様との人格的な交わり)—であつたに違いないのです。

私は初期アナバプティストの様子を映像化したビデオを見たことがあります。官憲に追われながら、

隠れ家のような家に4~5人で集まっているのです。そこにもう1人がやって来て「昨日、誰々が逮捕された」、「誰々が処刑された」というニュースをもたらす。その時に、彼らが何をするか。樽の中に隠し持っていた聖書を出して、1人が宝石でも扱うように開いて読んで聞かせます。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます」(マタイ 7:7)。そして皆で御言葉を喜ぶのです。聖書を読む(神の言葉に聞く)ことが迫害の中で彼らの信仰を支えたのです。私は「あんな思いで御言葉に向かっているだろうか」と問われました。

私達の信仰は、「1対1で神様と交わる」、「神様の言葉を通して神様(イエス様)と交わる」、それを抜きにしてはあり得ないと思います。「哀歌」にこんな御言葉があります。「主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい…主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに」(哀歌 3:22~25)。「朝ごとに新しい、恵みと憐れみ」、これを豊かに経験するためには、「御言葉を通して神様との1対1の関係を求め続ける」ことではないでしょうか。そうでなければ、今生きて働いておられる神を豊かに経験する信仰生活には、ならないのではないのでしょうか。

ある方が、次の証しをしておられます。彼女は弟さんが難病を持って生まれましたが、その弟さんが成長して、やがてある大きな教会の作業所で働き始めます。弟さんはイエス様を信じて、彼女を教会に誘うようになりました。彼女は弟さんに誘われるまま、礼拝に出るのですが、信じる事が出来ない彼女は、居眠りをしながら、後ろの席に隠れるように座っていました。しかし、時々聞えて来るメッセージには、涙がこぼれることがあるのです。そんな時、弟さんのこともあって、福祉関係の仕事に就職するのですが、隣人を愛せない、愛を持って接することが出来ない自分に悩むのです。そして、自分がボロボロになるような感じになるのです。そんな時に、ある集会でイエス様の為さった「放蕩息子の譬え」の話聞いたのです。自分勝手に生きて、財産を食いつぶし、ボロボロになって帰って来た息子を、走り寄って抱きしめ、温かく迎えてくれた父の話です。イエス様は「神様はこんな方だ」と語って下さいましたが、彼女は言っています。「走り寄って抱きしめてくださった神様の御手の感覚が体中に感じられました。私は子どものように泣きじゃくり、神様の胸に飛び込んで行きました」。

私達に信仰を与えるのは「神様(イエス様)との1対1の関係」です。その関係のために大きな役割を果たすのは、神の言葉です。私達は神の言葉を通して神様との豊かな交わりを求めて行きたいものだと思います。

2. 信仰の方法としての遡り

この箇所は、信仰の方法についても語ります。ヤイロは、ひとり娘が死にかかっていました。12歳というと、当時のユダヤでは、嫁にやっても良い年齢だと考えられていました。ヤイロにすれば「これからという時になぜ」という思い、深い絶望があったはずなのです。「長血の女」の方は、その12年間を病気に苦しみ、全財産を使い果たし、それでも誰にも治してもらえずにいました。彼女もまた絶望の中にいたのではないのでしょうか。ある神学者は「2人とも力尽きていた」と表現しました。

しかし、ここでその力尽きた2人が、それぞれに見事な信仰を言い表し、イエス様の祝福に与っているのではないのです。ヤイロは「どうか、おいでくださって、娘の上に御手を置いてやってください」(23)としきりに願いました。しかし「あなたは本当に神の子ですから、私達を救って下さる方です。それを信じます」というような信仰を言い表しているわけではありません。ただ自分の悲しみ、絶望をイエス様の許に置いただけです。それなのに「お嬢さんはなくなりました」(35)という知らせが届くのです。イエス様は「恐れないうで、ただ信じていなさい」(36)と言われました。ということは、彼は恐れたのです。信じることは難しかったのです。イエス様がヤイロの家に着いた時、イエス様が「子どもは死んだのではない。眠っているのです」(39)と言われた時、人々は嘲笑いました。ヤイロも、どこかでそういう思いがなかったでしょうか。「これまで精一杯やったのに、神も仏もない」、そんな気持ちもあつたのではないのでしょうか。「長血の女」の方も、本当に苦しかったと思います。その苦しみ、悲しみを、イエス様の着物の房に触るということで表したのです。「だれがわたしの着物にさわ

ったのですか」(30)と問われた時、「私が信仰を持って触りました。だから癒されました」と胸をはって人々の前に出て来たわけではないのです。2人の信仰は、そんな信仰だったのです。

ただ、この2人に共通していることがあります。それは、2人がイエス様の前にひれ伏していることです。私達は、信仰生活の中で苦しい時があります。この2人のように絶望的な思いに追い込まれる時、「これからどうすれば良いのか」と力尽きたように思われる時もあるのではないのでしょうか。

「神様はどうしておられるのか」と、皮肉や怒りをぶつけたくなることもあるかも知れない。しかし、この箇所から学ばされるのは、イエス様は、決して私達に立派な信仰を求めておられるのではないということです。私達の力尽きたところから出て来るような、本音丸出しの信仰さえ、受け止めて下さるのです。それを受け止め、引き上げ、信仰として認め、励まして下さる方なのです。ただ、私達が求められるのは、そこで主の前にひれ伏す思いを持つことではないのでしょうか。しかし、私達が案外忘れてしまうのも、主の前にひれ伏す思いではないのでしょうか。

カナダにいた時、家内の友人が若くして癌に冒されました。私達も癒しを祈りましたが、癒されませんでした。しかし彼女は、最後の最後まで「父なる神様、父なる神様」と、神様の名を呼び続けました。意識が朦朧とする中でも呼び続けました。それこそは、神様の前にひれ伏す信仰の姿ではないのでしょうか。日本から駆け付けて来たご両親が、その彼女の姿に触れて、神の存在を認めたのです。彼女は家族の救いを祈っていました。でも彼女の力を超えたところで、神がご両親の心を開かれたのです。ご両親は、もちろん悲しい、辛い、でも神の御手の中で彼女が召されたことに、本当に慰めを感じておられました。私にそれを切々と語られました。

私も、何かあると神様に皮肉や文句を言ってしまう者なのです。食ってかかる者なのです。先日も、そのような自分の姿に戦慄を覚えました。だから自戒を込めて申し上げるのですが、神様の前にひれ伏す姿、その中にこそ、信仰者のあるべき姿があるのではないのでしょうか。私達は、神様に、イエス様に、ひれ伏すことを忘れてはならないと思います。

最後に

最初に申し上げるべきことが最後になってしまいましたが、マルコがこの箇所を通して一番伝えたいことは、「イエス様は自然界を治めておられるだけではない、病も、死をも支配する権威(力)を持つておられる」ということです。私達の主は、そういう力の主であり、また憐れみの主なのです。何よりもこの主を信頼して行きましょう。